

アンデルセン童話における自己投影 —自己救済と自虐性の間—

要約

デンマーク語 大島虹歩

本論文は、ジュリー・ブラウン著『作家たちの秘密 自閉症スペクトラムが創作に与えた影響』を書評することを主軸において、作品中でアンデルセンの自己投影が持つ特徴を明らかにし、またその自己投影がアンデルセンにとってどのような役割を果たしているのかについて、考察することを目的としたものである。

第1章においては、テーマについての簡単な説明を行い、第2章では、『作家たちの秘密 自閉症スペクトラムが創作に与えた影響』の概要を紹介した。第3章では、ブラウンの見解に対する筆者の評価と自閉症以外の問題の提示を行った。第4章では、アンデルセンの精神問題として、身分に対するコンプレックス、容姿に対するコンプレックス、かなわぬ恋愛への絶望、もう一人の自分との葛藤という4つの観点を提示し、ブラウンの取り上げた作品を別の切り口から、また彼の触れていない作品解釈も含め考察した。最終章5章では、以上の考察と分析から、アンデルセンの自己投影には、自閉症だけでなく様々なコンプレックスを抱えていた様子が見られ、アンデルセンが童話にそれらのコンプレックスや劣等感を投影することは、自分自身が何者であるかを理解するためであり、また童話の中で救いの手を差し伸べることは自分自身への救済でもあったということと、ありのままの自分と自分の感情を描くことのできる媒体である童話との出会いによって、アンデルセンは作家として成功することができたということとを結論として導き出した。